

第二章 永禄一二年宗論に関する基礎的考察

はじめに

永禄一二年、織田信長のもとでイエズス会宣教師と仏僧日乗による宗論が行われた（以下、永禄一二年宗論と記す）。この宗論はキリシタン史上あまりに著名な事件であったため、この時期を扱った論文・著書には必ずといってよいほど言及されている^①。しかしながら、その言及というのは、宗論後に起こる宣教師の京都居住の可否を巡る問題の方に力点が置かれ、宗論はその前にあった一事件として触れられているにすぎない。その内容も書翰ないしフロイス「日本史」の該当部分を引用して簡単に書かれているだけで、宗論自体を扱った研究というのは極めて少ない^②。

こうした背景には、永禄一二年宗論に関する記事が宣教師の史料にのみ見られ、邦文史料からは全く確認できないという点が大きく関係しているといえよう。イエズス会史料には誇張や偏見が見られ、信用できないとの見解をもつ研究者も多く、まして今回のように信仰に関わる出来事の場合ではなおさら疑わしいというのが一般的な意見であろう。そのうえ、この宗論を取り上げ分析を行った松田毅一氏までが、宗論の内容に対して否定的な見解を示したため^③、この宗論はフロイスによってかなり粉飾が施されたという印象が強く根付いている。しかし、松田氏の指摘は宗論の内容的検討、とりわけ書翰と「日本史」の比較検討に重点が置かれており、宗論までの背景や宗論後の動向などに関する邦文史料との照合、書翰と「日本史」の相違がどの程度あるかなど、まだまだ検討する余地が残っている。

そこで、本章では永禄一二年宗論を取り上げ、基礎的な考察を行うこととする。

一 永禄一二年宗論の信憑性

永禄一二年宗論の日時・場所など基礎的事項に関しては、すでに先学によって明らかにされている^④。にもかかわらず、その再確認が必要な理由は次の二点である。一つは、日付・場所などの比定の根拠が明確に説明されていないこと。もう一つは、二次史料のエヴォラ版日本書翰集からの検証であり、原文書翰や良質の未刊書翰などの記載が明らかにされていないことである。そのため、それらの比定がどこまで信用できるのかという疑問の余地を残していると言わざるを得ない。そこで、未刊史料との校合や邦文史料からの史料的根拠を示しながら、イエズス会史料に書かれた永禄一二年宗論の記載内容が事実か否かを確認していきたい。

永禄一二年宗論が記載されているイエズス会史料は、一五六九年六月一日付、都発、豊後のベルシヨール・デ・フィゲイレド宛ルイス・フロイス書翰とフロイス「日本史」に限られる。当然書翰の方が史料価値が高いが、残念ながらフロイス自筆による書翰は現存しない。管見の限り、同書翰はエヴォラ版日本書翰集^⑤のほかに、リスボア国立図書館にその写し^⑥が残されている。後者の方がフロイス自筆書翰の体裁に近いと思われるため、こちら

を底本として分析を進めていくが、現在翻刻されていないことに鑑み、エヴォラ版日本書翰集の該当箇所も注に併記する^⑤。

まず、永禄一二年宗論の日時と場所から確認していききたい。フロイスは京都復帰後信長を度々訪問しており、その訪問中に宗論が行われたと書翰には書かれている。その日時は記されていないものの、宗論の記事の後、「翌日、(中略)信長が尾張に向けて出発しました(Ao outro dia... Nobunangua partido pera Voary)」と書かれている^⑥から^⑦、宗論は信長が岐阜に戻る前日に行われたことが分かる。『言継卿記』を見ると、四月二〇日条に「織田弾正忠明日下向之由候間」とあることから、宗論の日は信長出発の前日四月二〇日となる。

宗論が行われた場所についても記されていないが、書翰には「国王「信長」の座敷と外の縁には入りきれぬほどの貴人がいました(aquelle Zaxiqi del rey & as verandas de fora che as de fidalgos, que não cabião)」^⑧とある。この時は、初めて信長に謁見した二条城普請場ではなく、ある建物の一室で謁見したことになる。そこで邦文史料からその建物を探ると、『言継卿記』四月二三日条に「今晚織田弾正忠妙覚寺江移云々」とあり、一五日条にも「烏丸父子、万里小路重相、予等、妙覚寺織田弾正忠所へ罷向」とあることから、信長は四月一三日に妙覚寺に移り、しばらく滞在していたことが分かる。その後、四月二一日に岐阜に帰るまで信長が移動した記事が邦文史料から確認できないので、宗論が行われた場所は妙覚寺内の一室であると考えられる。

次に宗論を行った相手日乗について見ていきたい。日乗は信長が足利義昭を奉じて上洛すると、まもなく信長と交流をもったようである。永禄一二年二月二九日には、村井貞勝や明智光秀とともに寄宿禁止の奉書^⑨を出しており、七月には伊勢に知行を与えられている^⑩ことから、信長との関係の深さが窺える。また、禁裏との繋がりも深く、村井貞勝とともに禁裏の修理奉行となっている^⑪。永禄一二年は日乗にとって多忙の年であり、禁裏修理をはじめ種々の案件で頻繁に信長のところを訪問したものと思われる。従って、宗論が行われた四月二〇日に日乗が信長のところを訪問し、フロイスと出会う可能性は十分にあったと考えられる。

この日乗がキリスト教を敵視していたことについては、フロイスの書翰や「日本史」などで反キリシタンの代表的人物として取り上げられ、「悪魔(Lucifer)」^⑫とまで評されていることは周知のことである。一方、邦文史料ではどうかというと、当該期の史料からは確認できないものの、後に書かれた排耶書からそれを読みとることができる。例えば、『蛮宗制禁録』という排耶書には、信長がキリスト教の布教を認めるか否かを相談した時、日乗が反対したこと^⑬が記されている。この排耶書自体は信憑性という面で問題がある史料だが、日本側の史料にも日乗が反キリシタンの立場にいたという記録があることは、イエズス会史料の内容を裏付けるものとして評価することができよう。また、宣教師が記した反キリシタンの人物として松永久秀と竹内季治がいるが、この二人と日乗が親しい関係にあった^⑭ことを考えても、日乗が反キリシタン側の人物であったことを窺わせる。

なお、日乗の綴りが書翰と「日本史」では異なっている。リスボア国立図書館所蔵書翰では「ニキオ(一)シヨ(一)シヨ(一)ニ(一)ニ(Niquioxonim)」、エヴォラ版日本書翰集では「ニキジョ(一)シヨ(一)ニ(一)ニ(Niquioxonim)」となっており、「日本史」では「ニチジョ(一)(Nichijo)」と書かれている。すべて写本であるが、読みとしては「日本史」が正しい。

松田毅一氏によれば、chiは原文から写本へ、写本から刊本へと筆写されていく過程でquiへと変化する事例があることを挙げている^{⑤⑥}。書翰も原文ではchiであったと推測される^{⑤⑦}。以上、永禄一二年宗論が四月二〇日妙覚寺において行われたというフロイス書翰の記事は、邦文史料と照合しても十分整合性が認められ、史実と確定することができる。

最後に、この永禄一二年宗論が果たして宗論と呼べる性格のものなのかという点について考える必要がある。この宗論に言及した研究を見ると、「宗論」と訳しているものが大半であるが^{⑤⑧}、「(宗)論」と括弧付きで記しているものもある^{⑤⑨}。この原文はdisputaで^{⑥⑩}「討論・論争」と訳される語句であることから、訳者は正確を期すためにあえて「(宗)論」としたのであろう。

信長時代の宗論といえば、天正七年(一五七九)五月に安土城下で法華宗と浄土宗との間で行われた安土宗論が有名である。この宗論は『信長公記』に「既宗論究(傍点筆者、以下同様)」「浄土宗の寺浄厳院仏殿にて宗論有」と記されていることから^{⑥⑪}、安土宗論は当時の人々にも「宗論」として認識されていたことが分かる。『信長公記』には、宗論に至るまでの経緯、宗論の判者、宗論の内容、裁決などが詳細に記され、宗論になるという段階では判者・警護役・場所などが決められていることが分かる。一方、永禄一二年宗論の場合は、宣教師が信長を訪問した際に、信長が側にいた日乗に質問をさせたことから始まったもので^{⑥⑫}、当然判者や警護役などは決められていなかった。判者や警護役がいることが宗論の絶対必要条件であったかどうかは明確にし得ないが^{⑥⑬}、内容の限りで言えば永禄一二年宗論は厳密な意味での宗論とは異なるように思われる。

しかし、『日本仏教史辞典』^{⑥⑭}の「宗論」の項目には「法論、問答ともいう。教義の異なる宗派間において宗義の優劣、真偽をめぐる論争」と、『日葡辞書』の「宗論(Xuron)」の項目にも「教法や宗派に関する論争 (Disputa sobre as leis, ou seitas)」と書かれている。永禄一二年宗論もイエズス会宣教師と仏僧による、キリスト教と仏教という教義の異なる宗教間の教義上の論争・討論であるし、フロイス自身も今回の宗論を『日葡辞書』の「宗論」の項の説明にあるdisputa「討論・論争」と記している。従って、辞書の意味およびフロイスの認識では「宗論」ということになる。以上の点から、このフロイスと日乗の論争を広義の意味での「宗論」と理解し、本章では「宗論」と記載することとする。

二 永禄一二年宗論の内容的考察

宗論の内容的考察はすでに松田毅一氏が行っていることなので、まずはそれについて触れたい。氏はフロイス書翰と「日本史」の比較検討を行い、「日本史」の記載内容は書翰のそれと論旨は同じであるものの、内容はかなり異なっており、「日本史」の方が遙かに敷衍しているとする。そして、「日本史」を執筆した際に、ヨーロッパの読者や後輩に興味を抱かせるようこの宗論を脚色したとの見解を示す^{⑥⑮}。この点について見ていくことにしたい^{⑥⑯}。

宗論は始まり方からフロイス書翰と「日本史」で大きく異なる。書翰ではこうである。まず信長が宣教師に対して、仏僧が宣教師を憎悪する理由と神仏を敬うか否かを質問した。それに対してロレンソが自分たちと彼らは相容れぬ存在であると、また後者については神

仏はいずれも人間であるので敬うことはしないと答えた。この返答を受けて信長は「日乗上人はこれに対して何と言うか。何か尋ねてみよ (dixe el rey então Niquioxonim que dezeis a isto, preguntay alguma cousa.)」⁽⁶⁷⁾と質問させたことから宗論が始まった。一方、「日本史」では日乗が信長に対して「拙僧は、伴天連が説く教法を少し承りたい。殿がここで彼がそれを拙僧に説くように命じ給えば嬉しく存ずる (Dezejo de ouvir alguma couza desta ley que o Padre prega: folgaria que V.A. lhe mandasse que aqui me dissessem alguma couza della)」⁽⁶⁸⁾と述べたことにより始まっている。「日本史」の方がより宗論らしく記されている。宗論が始まると、最初に信仰対象の話がされる。書翰を見ると、信長が質問するように言ったのを受けて、日乗は信仰対象に関する質問を行い、ロレンソは三位一体のデウスについて説明を始める。一方「日本史」では、ロレンソがデウスについて話す前に、日乗に信仰対象の質問をしている。日乗は自身の信仰対象について話すことを避け、宣教師の信仰対象を話すよう促し、そこでロレンソはデウスに関する話を始める。書翰での記載が比較的簡潔なのに対して、「日本史」では何度か問答がされたように記されている。他に、「日本史」では比叡山の心海上人⁽⁶⁹⁾の話まで出てくる点が大きく異なる。

ロレンソのデウスに関する説明の後、日乗はデウスを見せるようにと言うが、ロレンソは、デウスは見るできないと返答する。また、デウスは釈迦や阿弥陀よりも以前のものかという質問に対して、ロレンソは以前のものであり、無限で永遠なるものであると答えた。この点について、日乗は理解できなかったようで、信長に彼らを追放するよう進言したことが記されている。問答は続き、今度はロレンソが日乗に生命の作者について質問したところ、日乗は返答しなかった。そこでロレンソはその説明をすると、日乗は禪宗の本分とデウスは同一であると主張した。ロレンソはそれを否定し、その相違を説明した。ここでまた日乗は信長に彼らの追放を訴えている。信長はこの日乗の発言には耳を貸さず、ロレンソにデウスは善には報償を、悪には罰を与えるのかと質問したことが記されている。以上は書翰の内容である。「日本史」でも日乗がデウスの色や形態に関する質問をしているが、それに対するロレンソの返答は書翰に比べるとより詳細なものとなっている。デウスへの奉仕の仕方やデウスを讃える理由についての質問に対しても、ロレンソは丁寧に説明している。このロレンソの回答に対して、信長が分別を弁えないような人間はどうするのかと質問したことなどが記されているが、これらはフロイス書翰には記されていない。ここで、ロレンソが病気を患っていたことから宗論の続行が不可能となったため、フロイスが宗論を引き継いだと記されている。この点は表現の仕方では相違点が見られるものの、両史料ともほぼ同じ内容である。ただ、これまでの所要時間が書翰では二時間だが、「日本史」では一時間半となっている。

宗論を引き継いだフロイスは、日本の宗教は「無 (não aver nada)」を根本とし、「四大 (quatro elementos)」⁽⁷⁰⁾の可視的なもの以上には及ばず、四大の原因についての知識もないため、不可視で不滅の靈魂が分らないのだと述べ、靈魂の存在について説明した。以上の書翰の内容に比べ、「日本史」ではより詳細に説明しているが論旨は同じである。

すると、日乗は激昂して「汝は靈魂が存在すると言うのであるから、今ここで私に見せるべきである。そこで、私は存在すべき知的物質を見せてもらうため汝のこの弟子 (私の傍らにいたロレンソ) の首を斬ることにする (Pois dizeis que fica a alma, aveis ma agora da mostrar, & pera isso eide cortar a cabeça a este vosso disciplo, que era Loureço, que estava a

par de mym pera me mostrades a sustancia intellectual que fica)」と言ひ、「激しい怒りで部屋の間にかけてあつた国王「信長」の長刀目掛けて突進し、鞘を外し始めた (com inaudita ira aremeteo correndo a huma nanguinata del Rey que estava encostada no canto da camara em a começando a desembainhar)」⁽³¹⁾。すぐに日乗は取り押さえられ、「国王は笑いながら、再び座るように言ひ、予の面前でそのようなことをするのは甚だ無礼である (el Rey rindo se lhe disse que se tornasse [assentar] que boa discortezia era aquella que fazia diante del [e])」⁽³²⁾と言ひ、他の者も同様に日乗の行動を批判した。とりわけ和田惟政は信長の面前でなければ、日乗を斬っていたと述べていたことが記されている。

以上はフロイス書翰の内容であるが、「日本史」も多少表現が異なるものの内容ほぼ同じである。ただ、書翰で「長刀 (Naginata)」とあるところが、「日本史」では「長剣もしくは両手で (扱) 刀 (hum estoque ou espada de ambas as mãos)」⁽³³⁾となっている点、日乗を取り押さえたと、信長がこの暴挙を非難して「日乗、貴様のしたことは悪行である。仏僧がなすべきことは武器をとるのではなく、根拠を挙げて自身の教法を弁護する」⁽³⁴⁾ではないか (Mal o tens feito, Nichijo, porque não hé dos bonzos arremeter às armas mas defender sua ley com rezões)」⁽³⁵⁾と言ひたと書かれている点が異なる。他に「日乗がこの暴行と騒動を犯していた間、司祭「フロイス」と修道士「ロレンソ」は、そのいた場所からまったく動かなかつた (E enquanto Nichijo fez este excesso e perturbção nunca o Padre n em Irmão se moverão do logar onde estavam)」⁽³⁶⁾といひの「日本史」でのみ見られる記載である。

以上が宗論の内容である。信仰対象デウスに関するロレンソの説明から始まり、続いてデウスが見えるか否かという問答に移行し、最後は靈魂が不可視なものでも存在すると述べるフロイスに対し、日乗が激昂して「長刀」を手に取ったところを取り押さえられた、というのが宗論の大筋の流れである。この点ではフロイス書翰、「日本史」で一致する。両者の違いは、「日本史」の方がより問答の数が多く、内容も詳細な点である。他に、書翰では信長が日乗に質問させたことから始まったが、「日本史」では日乗が信長に宣教師との宗論を申し出ている形に改められている点、日乗が長刀もしくは刀を手にした時、宣教師は微動だにしなかつたことが「日本史」のみに書かれている点など、書翰に記される内容よりも一層宗論らしく、そしてキリスト教の勝利を強調するかのように表現していることが読みとれる。これらの点から、松田氏の見解通り、「日本史」の記事は事実を相当脚色しており、史料価値という点で書翰より質が落ちると言わねばならない。

では、フロイス書翰に書かれている内容が、記載通りに実際行われたのであろうか。この点について、松田氏はフロイスの日本語の語学力を疑問視し、文言通りに論じることができなかつたとの見解を示す。その根拠として、フランシスコ・カブラルの報告にある「在日宣教師の中では、十六年間 (日本語) の研究を積んだルイス・フロイスが確かに日本語に通じているが、そのフロイスでさえも異教徒の前では公然と説教することはなく、キリシタンの面前で (説教するのにも) 支障がある位である」という記述を挙げている。氏はロレンソの通訳によって行った可能性についても言及しているが、「ヴァリニャーノが来日した頃、日本人の中でポルトガル語を満足に解するのは、ジョアン・デ・トルレス修道士位であつたと彼は証言している」という事例を挙げ、その可能性も否定している⁽³⁸⁾。

そこで、フロイスの発言部分をもう一度見ていこう。要点をまとめると以下のような

る。①日本の教えは何も存在しないことを根本とし、四大に含まれる可視的な物より他に及ばない。そのうえ、四大に関する知識もない。だから、見えない霊魂を理解できないのも当然である。②人間には二つの見方があり、一つは肉体の目によるもの、もう一つは道理と知力の目によるものである。③演説や瞑想、悟りの業を行うことで全身の活動は少なくなるが、霊魂は活発となる。これは肉体と霊魂が同一のものであれば不可能である。④霊魂は合成物ではないので分解できない。また、肉体が病んだ時理性も衰えるならば、理性は永続することはないが、そうではないのなら死後に霊魂が存在するのは明白である。

フロイスの発言部分はこれまでのロレンソのそれよりも高度で、ましてや外国人のフロイスが日本語で説明したとなると、実際に行えたのかという松田氏の疑問も領ける。しかし、こうした宣教師と仏僧や知識人との宗論は今回が初めてのことではなく、すでに各地で行われていたことなのである。この点について、岸野久氏は、山口においてフランシスコ・ザビエルやコスメ・デ・トルレス等が宗論を行い、仏教とそれに対する論破の理論が研究されていたことを明らかにしている⁵³⁾。事実、この時期の書翰を見ると、山口で行われた宗論の様子が詳細に記されており、内容も今回フロイスが説明したものと似ている。

例えば、一五五一年九月二十九日付、山口発、豊後のフランシスコ・ザビエル宛コスメ・デ・トルレス書翰の中で、禅宗に関する記述があるが、そこで「無から造られたものは無に帰す (o que se criou de nada se torna em nada)」⁵⁴⁾と日本人が言っていたことを伝えている。また、同年一〇月二〇日付、山口発、豊後のフランシスコ・ザビエル宛ジョアン・フェルナンデス書翰では、山口の宗論を報告し、日本人が四大に関する知識を持っていた点、霊魂が何色でいかなる形態であるかとの質問に対し、トルレスが空気を例に霊魂は色や形はないが存在すると答えた点などが書かれている⁵⁵⁾。同じくフェルナンデス書翰に、霊魂と肉体は同一ではなく、霊魂は不滅であることをトルレスが答えたことも記されている⁵⁶⁾。従って、この二通の書翰から、永禄一二年宗論でフロイスの言及した①④すべての内容をすでに山口の宗論でトルレスが答えていたことが分かる。

しかも、この山口での問答を日本語で書き留めておくように、フェルナンデスはトルレスから命じられていた⁵⁷⁾。こうした宗論の記録は山口に限らず、各地で日常的に行われていたことが一五八二年度の日本年報から窺える⁵⁸⁾。つまり、イエズス会宣教師はかなり早い段階から日本での宗論の記録を現地語である日本語で記録し、仏教理解と宗論での論破の研究がされていたといえるのである。

当然フロイスやロレンソもこのような研究を行っていたはずなので、フロイスが一見高度とも思える内容を語ったとしても、彼にとってはとりわけ困難なことではなかったと考えられる。もちろん、これを流暢に理路整然と話せたかどうかは定かではないが、少なくとも書翰に書かれた内容ぐらいいは伝えることができたのではないだろうか。

以上の考察により、フロイスの記す宗論の内容は大枠では正しいという結論に達する。

三 永禄一二年宗論の性格と意義

永禄一二年宗論が史実であり、内容もフロイス書翰の記事で大枠は正しいことを明らかにしてきたので、それを踏まえてこの宗論の性格と意義について考えてみたい。

永禄一二年宗論は信長のもとで行われたことと、その内容があまりに劇的であったことから、研究者の間で早くから注目されてきた。しかし、永禄一二年宗論のように、たまたま始められた形での宗論というのは、実際は相当数行われていたであろうから、宗論が行われたこと自体は特異な事例として位置づけることはできない。

今回の宗論で注目すべき点は、宗論の結末とその場にいた信長の対応にある。永禄一二年宗論は始まりばかりでなく、宗論の結末もあいまいな形で終わってしまった。ただ、宗論では判者が判定せずとも宗論の中でどちらかが言葉に詰まって決着するケースもあったようで、安土宗論も同様な結末であった。『信長公記』によれば法華宗が言葉に詰まったといい、法華宗側の記録では逆に言葉に詰まったのは浄土宗側であると記録に違いが見られるが⁵⁵、言葉に詰まった時点で宗論に決着が付くという点では共通している。永禄一二年宗論の場合も、霊魂の存在を証明するため「長刀」を手にしたとはいえ、激昂し、言葉に詰まった上での行動であることから、事実上決着がついたと判断することができる。

実際、この宗論の場にいた多くの聴衆は、日乗の行為に対して無礼で宗論らしからぬと口々に語っていた。フロイス「日本史」にも同様のことが書かれており、京都中今回の宗論の話で持ちきりで、仏僧であるのに激昂して信長の面前で「長刀」をとった行動は、日乗があそこで負けた明白な証拠だと語り合っていたとある⁵⁶。宗論に居合わせた者の間では、宗論は宣教師の勝利、日乗の敗北と判断されていたといえる。

では、誰の目からみても勝敗がはっきりしていた今回の宗論に対して、信長はどのような対応をとったのであろうか。安土宗論の時は判者の秀長老と勝者の浄土宗の僧霊蒼長老、貞安長老にそれぞれ褒美を与え、敗者の法華宗には宗論に敗れたため以後は他宗派に対して法難しないこと、法華宗を存続させていたことに対して感謝する旨の起請文を書かせた⁵⁷。また、宗論を引き起こした張本人である大脇伝介と建部紹智は首を斬られている。一方、永禄一二年宗論では、勝者となった宣教師側に好意を示し、修道院まで信長の兵を護衛につけるなど丁重に扱うが、宗論に対する褒賞は特になかった⁵⁸。日乗に対しては、宗論に敗れただけではなく、信長の面前で「長刀」を手に取るという行為に及んだにもかかわらず、特に罰せられることはなかった。この行為は日乗からすれば霊魂の存在を確かめるための問答の一つだったのであろう。しかし、周囲の者には尋常ではない行為として受け取られていた。和田惟政もこの行為に激怒し、信長の前でなければ切り捨てていたと述べており、また信長の死後フロイスが秀吉に謁見した際にもこの時のことが話題に挙がったが、その時自分ならば日乗を切り捨てていたと秀吉が語っている⁵⁹。つまり、日乗の行動はその場で斬られていてもおかしくないものだったのである。

にもかかわらず、日乗は処罰されなかった。その理由として、永禄一二年宗論はたまたま行われたもので、信長も面白半分で聞いていたためということが第一に挙げられよう。すなわち、安土宗論の時のような敗者を厳格に裁定し、処罰をするといった政治的な思惑は信長にはなかったと解釈することができる。しかし、宗論だけを見ればこのような解釈でよいが、実際はそう簡単に片付けられる問題ではない。日乗はこの宗論の後信長に執拗に宣教師追放を訴え、信長からその許可が得られないと悟ると、今度は朝廷に訴え伴天連追放の論旨を手に入れる⁶⁰。それは、宣教師に京都居住許可の朱印状を与えている信長にとって、許し難い行動である。宗論の時には面白半分で聞いていたとしても、その後の日乗の行動は信長にとって無視できないものであった。そうした日乗の一連の行動を踏まえる

と、宗論で「長刀」を手に取り、失態を演じた日乗に対して信長が何の処罰をしなかったことは看過できない問題となってくる。フロイスは信長が日乗を処罰しなかった理由として、日乗が禁裏修理奉行だった点を挙げている⁵⁶。フロイスの言うとおり、日乗はこの時期禁裏修理奉行になっており、禁裏にも信長にも関係が深かった。当時の信長にとって日乗は必要不可欠な人物であったといえるだろう。従って、日乗が処罰されなかったのは、そうした点も含めて検討しなければならない⁵⁷。

以上を踏まえると、今回の永禄一二年宗論は以下のように評価することができる。永禄一二年宗論自体はキリスト教と仏教という宗教上の対立であったが、これを機に日乗を伴天連追放という運動に駆り立て、遂には伴天連追放の論旨が出されるに至った。つまり、永禄一二年宗論は宗教上の対立から政治上の問題に発展する起点となった出来事として評価することができる。従って、永禄一二年宗論は宣教師と仏僧の対立といった宗教史の側面だけでなく、政治史の面からも位置づけるべき問題といえるのである。また、宗論後の日乗の行動も含めて考えると、日乗に対して何の処罰もしなかった信長の行動は無視できない問題であり、当該期の織田権力の実態を解明する上でも重要な問題となってくるのである。

おわりに

永禄一二年宗論は、信長のもとで行われたこともあって、早くから取り上げられてきたが、その記載がイエズス会史料にしかみられないことから、宗論に対して否定的な見解を示す向きも多かった。本章ではこうした研究状況に鑑み、宗論の基礎的考察を行った。

まず、永禄一二年宗論が和暦の四月二〇日妙覚寺において行われた点、フロイス「日本史」はフロイス書翰より詳細であるが、作為の跡が認められる点については、先学の指摘通りである。

しかし、フロイスの語学力を疑問視し、フロイスの発言部分に疑問をもつ松田毅一氏の見解には賛同できない。確かに、フロイスの発言内容は相当高度であるものの、これ以前にすでに宣教師は山口などで宗論を行っており、宗論での論破の方法も研究していた。従って、一見高度ともいえる内容も、フロイスにはさほど困難ではなく、書翰に書かれた程度のことでは発言できたものと考ええる。

永禄一二年宗論の性格については、信長がたまたま同席した日乗に質問させて始まったことから、安土宗論のような政治的な思惑はなかった。よって宗論だけを見れば、よくある宗論の一つであったといえよう。しかし、宗論後日乗は宣教師追放を信長に進言し、それが無理と悟ると天皇から伴天連追放の論旨を手に入れるに至る。この論旨は、信長や足利義昭の宣教師居住許可の朱印状や制札と対立する内容のものであり、これが後に大きな問題となってくる。つまり、永禄一二年宗論は、キリスト教と仏教による宗教上の対立から、その後日乗を宣教師追放に駆り立て、宣教師の京都居住を巡る問題にまで発展していく一連の事件の契機となった出来事として位置付けることができる。